

日本語指導を必要とする生徒に対する英語指導における 効果的なアプローチについて

学籍番号	229346
氏 名	高橋 智佳
主指導教員	南野 起一
副指導教員	田中 真秀

1. 背景

1.1 研究背景

文部科学省は、日本における日本語指導を必要とする生徒数は10年で約2倍となり、そして今後も増加することが見込まれているとしている。大阪府においても、当該生徒は増加傾向にあり、公立高等学校入学者選抜における帰国・外国人生徒等の特別定員枠を設ける「枠校」8校が入学時点での日本語能力を問わず生徒の受け入れを行っている。枠校では日本語学習を支える母語学習にも重点を置き、他者とながら日本社会で生きていくための力を育成することが目指されている。枠校にて学ぶ生徒は、日本語学習と、教科学習を並行して進める必要がある。教員は、生徒らの実態を把握するとともに教科指導の知見に日本語指導の視点を取り入れる必要がある。実習を通して文部科学省はガイドラインを示すも、各教科において日本語指導の視点を取り入れた手引きが存在しているわけではなく、指導内容や方法については各教員の裁量に委ねられ、その範囲が大きいことが分かってきた。

1.2 目的

本研究は、英語指導においてどのようなアプローチをとることが日本語指導を必要とする生徒にとって効果的であるのかを考察することを目的とした。今後さらに生徒が多様になることが見込まれる中で、教科指導の視点に日本語指導の視点を取り入れる模索を積み重ねることは重要な事柄であると考えられるからである。

2. 研究方法

2.1 先行研究

文部科学省は、日本語指導を必要とする生徒を対象とした JSL カリキュラムの開発を行ってきた。教科指導型日本語指導として、教科学習において日本語で参加し、学ぶ力の育成が目指されている。教員は支援の視点を取り入れることや、日本語と教科の目標・目的を明確にすることが求められている。

2.2 授業実践

先行研究に基づき JSL カリキュラムの 5 つの支援の視点に留意しながら授業を構想し、英語コミュニケーションの授業内にて実践を行った。また、授業実践の前後において、レーダーチャートを用いて、生徒の目標に対する達成度合いの変化を明らかにすることを試みた。

指導や生徒に関する情報等が含まれているため、要旨への詳細の記載は省略する。

2.3 インタビュー調査の概要

授業実践と生徒の実態を明らかにするためにインタビューを行った。母語・英語・日本語の運用能力の関係性が異なる 3 名を対象に、(1) 授業構成内容について、(2)(3)英語の授業の中で自分ができる/できないと考えていることとその理由の項目を元にインタビューを実施した。

3. 結果

3.1 授業実践を通じた生徒の変化

目標に対する達成度合いの変化の結果をもとに、支援の視点を取り入れた授業によって、各支援との関連の中で、クラス全体で概ね良好な変化がみられた。

3.2 インタビューの結果

生徒の「ルーツ」に関連を持つ授業構成に対して、「楽しい」と表現し、リラックスができてきている状態や、日本語と英語に対しての「出来る・出来ない」の自己認識が反対である生徒らの様子、分からないことがあったときには、同じ国にルーツを持つ生徒に尋ねている様子を確認できた。

4. 考察及びまとめ

日本語指導が必要な生徒にとっての、英語指導における教員の効果的なアプローチについて、目標に対する達成度合いの変化と生徒へのインタビューにより分析を行った。

その結果、

- ①生徒のルーツに関連する内容をアクティビティのテーマに選定すること
- ②言語の運用能力の差異を捉え積極的に活かすこと
- ③言語・学習状況の把握において「対話」を重ねること

が生徒の学習意欲や学習効果につながる効果的なアプローチの一部となることが考察できた。

5. 今後の展望

どのようなアプローチが生徒にとって有効であるか考察することは、生徒らの学習意欲を引き出し、出来ることを増やし、複雑になっている教育内容を紐解き、「学校での学び」を継続し、学校に通う楽しみに少なからず繋がっていく展望が見えた。

生徒の実態やアプローチの考察を継続し、さらに生徒の学習意欲や学習効果の向上に結び付けていきたい。